

日本保育学会第64回大会自主シンポジウム

## 保育評価のストラテジー

評価ツールの活用・展開とオリジナリティの発揮

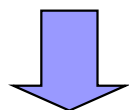
2011年5月22日(日) 12:30～ 於:玉川大学

明石市立大観幼稚園 小尾 麻希子

# I. 研究の目的

本研究が目指す「保育評価」

- 子どもの育ちがみえる。
- 子どもの育ちに応じた保育者の関わりがみえる。
- 保育現場において、継続しやすい。



保育の「構造評価」「プロセス評価」「到達度評価」を用いて、

明日の保育構築に繋がる  
「保育評価」について探る。

## Ⅱ. 研究の方法

- 対象：兵庫県A市幼稚園  
5歳児19名（2年保育）
  
- 実施期間：平成22年4月～12月
  1. レスキュー隊ごっこ（平成22年4月下旬～12月中旬）
  2. 店屋ごっこ（平成22年10月上旬～12月中旬）
  3. クリスマスごっこ（平成22年11月下旬～12月中旬）
  
- 評価方法
  1. 構造評価
  2. プロセス評価
  3. 到達度評価

# 1. 構造評価

## ■ 『保育環境評価スケール』を用いて評価

Thelma Harms, Richard M. Clifford, Debby Cryer 著 / 埋橋 玲子訳

スケール項目	
①「空間と家具」	②「個人的な日常のケア」
③「言語－推理」	④「活動」
⑤「相互関係」	⑥「保育計画」
⑦「保護者と保育者」	

- ・保育者が月に一度評価する。
- ・保育のベースとなる物的・人的環境、保育計画について見直す。

## 2. プロセス評価

### ■ 第1段階

子どものごっこ遊びに着目した「実践事例」を作成し、  
ごっこ遊びへの参画過程について考察

### <実践事例>

ごっこ遊びへの参画スタイル(5歳児)名前( ) (月 日)		
幼児の姿	保育者の関わり	考察 —A児のごっこ遊びへの参画過程—

## ■ 第2段階

- ・ 実践事例を基に、子どものごっこ遊びへの参画スタイルに関する「チェック・システム」を作成(加筆、修正しつつ作成)
- ・ 該当児の参画スタイルについて、該当欄にチェック
- ・ チェックした理由を併記

仮説①「チェック・システム」を作成する過程で、子ども一人一人の育つ道筋がみえてくる。

②「チェック・システム」の活用によって、評価に要する時間が短縮され、保育現場で継続しやすいものとなる。

ごっこ遊びへの参画スタイルチェック・システム(5歳児)名前( )

段階		状態	月日	月日	月日	
参加しない	興味を示さない					
	興味はある					
参加する	見ている	他の子どものすることを見ている				
	自分なりに取り組む	保育者の提案を受け止める				
		他児から言われた役割をする				
		他児の模倣をする				
		模倣するが自分のアイデアを付け加える				
	イメージを共有する	自分なりのアイデアを出す				
		他児の参加を受け入れる				
	遊びの目的を共有する	他児のアイデアを受け入れ、自分もアイデアを出す				
		自分で選んだ役割を担って、必要なものを準備する				
		目的にそって自分の思いやアイデアを提案する				
		目的にそって他児と自分のアイデアを組み合わせる				
		他児のよさを受け入れる				
		他児に自分のよさを認められて自己肯定感をもつ				
	互いのよさを認める					

## ■ 第3段階

- ・ 実践事例を基に、子どものごっこ遊びへの参画スタイルの背景にある保育者の関わりに関する「チェック・システム」を作成（加筆、修正しつつ作成）
- ・ 該当する保育者の関わりについて、該当欄にチェック
- ・ チェックした理由を併記

仮説①「チェック・システム」を作成する過程で、保育者の関わりについて整理され、保育の方向性や意図がみえてくる。

②「チェック・システム」の活用によって、評価に要する時間が短縮され、保育現場で継続しやすいものとなる。



## 資料2 <保育者のかかわりに関するチェック・システム> (一部抜粋)

保育者の関わりに関するチェック・システム(5歳児)名前( )						
月日	ごっこ遊びへの参画スタイル	幼児の育ちへ向かう課題				
月日						
月日						
月日						
ごっこ遊びへの参画スタイル		保育者の関わり	月日	月日	月日	
参加しない	興味を示さない	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 幼児の姿の背景にあるものを探る</li> <li>・ 幼児の様子を見届け、興味を示さない理由を探る</li> </ul>				
	興味はある	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 幼児の様子を見届け、参加しない理由を探る</li> <li>■ 幼児の実態を踏まえ、幼児の傍らにいる</li> <li>・ 興味のある遊びに誘い掛ける</li> <li>・ 幼児と一緒に他児の遊びを見に行く</li> </ul>				
	参加する	見ている	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 他児のすることをみている</li> <li>・ 保育者の提案を受け止める</li> <li>・ 他児から言われた役割をする</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 遊び始めるきっかけをつくる</li> </ul>		
			<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 遊びに誘い掛ける</li> </ul>			
			<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 他児の使っているものと同じものを手渡す</li> </ul>			
			<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 保育者も一緒に遊びながら、安心感をもたせる</li> </ul>			
		<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 保育者も幼児と同じものを使って遊ぶ</li> <li>・ 幼児と対話しながら保育者も一緒に遊ぶ</li> </ul>				

## 3. 到達度評価

### ■ 第1段階

- ・ プロセス評価で得た気づきを基に、ごっこ遊びに焦点を当てた日の指導計画作成。保育のねらいをできるだけ細分化して記述
- ・ 保育終了後、各ねらいの到達度を5段階で評価
- ・ 到達度を決定した理由を併記

仮説① 子ども育ちがみえると、保育のねらいが明確に立てられるようになる。

② ねらいを明確にすると、必要な保育者の関わりが具体的にみえてくる。

③ 各ねらいの到達度は、プロセス評価で捉えられる子どもの姿より評価できる。

④ 到達度を決定した理由から明日の保育の方向がみえてくる。

### ■ 第2段階

- ・ 環境、保育者の働き掛け等、明日の保育の方向を記述

## Ⅲ. 結果と考察


### 1. 結果

(1) 子どものごっこ遊びへの参画スタイルに関する「チェック・システム」(資料1)の作成・活用を通して、次のような結果が得られた。

- ① 子どものごっこ遊びへの参画スタイルが整理され、子どもの育つ方向がみえやすくなる。
- ② 子どものごっこ遊びへの参画スタイルは、遊びの深まりとともに、子ども一人一人が自分なりに取り組む段階から他児と遊びの目的を共有する段階へと移り変わる。子ども一人一人の育ちとともに集団の育ちがみえてくる。
- ③ 子どもの育つ方向がみえると、子ども一人一人に必要な保育者の関わりがみえてくる。

(2) 保育者の関わりに関する「チェック・システム」(資料2)の作成・活用を通して、次のような結果が得られた。

- ① 保育者自身の**保育の方向性や意図が整理**され、子どもの育ちに応じた保育の方向がみえてくる。
- ② 子どもの育ちに応じた保育の方向がみえると、保育者の関わりは、**みる、働き掛ける、一緒にする、子どもをつなぐ、引き出す、任せる(見届ける)**段階へと移り変わっていく。
- ③ 保育者の関わりの中に位置付けられる環境づくりにおいても、**環境を「構成する」**だけでなく、子どもの要求やイメージ、願いに応じて**環境を「転換する」**段階がみえてくる。
- ④ 長いスパンにおける保育が見通せ、環境構成の順序が分かるようになる(**環境を「構造する」**段階がみえてくる)。



(3) 「チェック・システム」を作成することによって、子どもの育ちや保育の方向性・意図が整理されて目で見てよく分かるようになり、短時間に評価ができる。評価が継続できる。

## 2. 考察

(1) 保育者自身が保育を振り返り、評価することによって、次のように保育者が変容する。

① 子どもの育ちをみる力が向上する。

「みる」から → 「みえる」へ

② 子どもの育ちがみえると、保育のねらいや保育者の関わりが明確になり、指導計画が充実する。

概念的な計画から

→子どもの主体的生活を生み出す実質的な計画へ

③ 環境を創造する力が向上する。

環境を構成するから

→環境を構成する＋構造する＋転換するへ

④ 実践する力が向上する。

みるから


→働き掛ける、一緒にする、子どもをつなぐ、引き出す、  
任せる(見届ける)段階へ

⑤ 評価する力が向上する。

評価する力とは

- ・ 子どもの育ちがみえる力
- ・ 保育者の関わり(援助・環境の創造)を見通す力
- ・ 指導計画を見通す力

⑥ 保育を構築する道筋が生み出される。

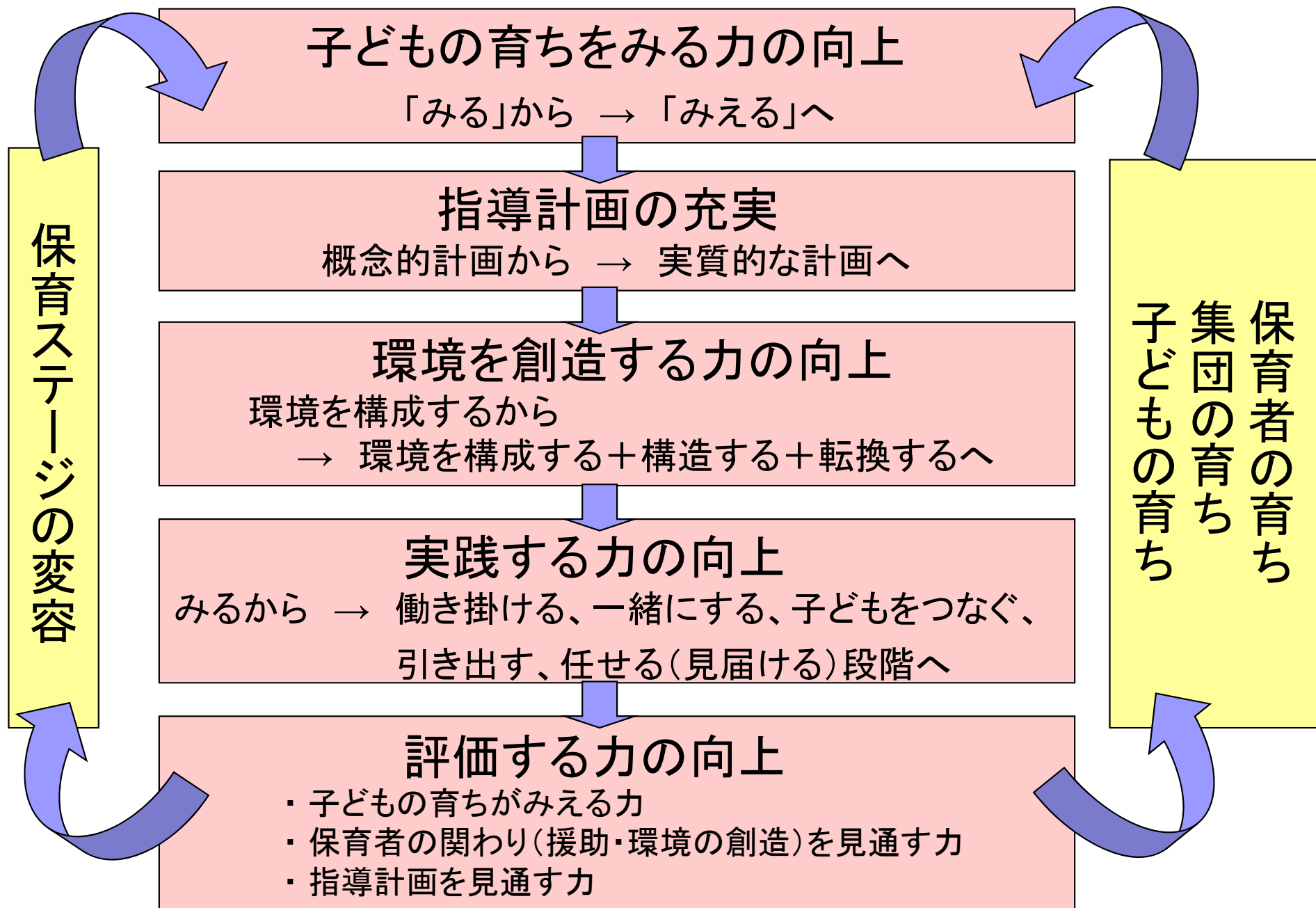


(2) 保育を構築する道筋の中で、**子どもが育ち、集団が育ち、  
保育者が育つ。**

(3) 保育を構築する道筋の中で、**保育ステージが変容する。**



# 保育の構築



## IV. 今後の課題

### ■ 保育評価システムの創造をめざして

1. 実践を通して、「チェック・システム」の加筆・修正を続け、子どもの育ち及び保育者の関わりに関する新たな項目や、より細分化された項目を見出す。
2. 到達度評価の方法について考案し、到達度評価においても「チェック・システム」の作成、活用を試みる。
3. 到達度評価を工夫することによって、「保育ステージ」がみえてくるのではないか。
4. 『幼稚園教育要領』との関連付けを行う。